書評

ニールス・ファンステーンパール著『〈孝子〉という表象——近世日本道徳文化史の試み』

（ぺりかん社・二〇一七年）

殷　暁　星

一

著者であるニールス・ファンステーンパール氏は、メディア・教育・思想など、複眼的な視点から、近世日本における「孝子」について研究されてきた。本書は二〇一二年三月に、著者が京都大学大学院教育学研究科に提出した博士学位論文を大幅に加筆・修正した成果である。

本書「プロローグ」で指摘されているように、日本道徳史をめぐる研究は、概ね思想史と社会史の分野で展開され、それぞれの分野において、徳目の思考と徳目の実践が検討されてきた。また、教育史の分野においても、近世民衆の道徳生活に関する研究が蓄積されている。例えば、「教化」を目的とする道徳律の提唱や、近代「道徳教育」「修身」との関連などについての議論が見られる。本書で再検討される「孝子伝」の編纂を限ってみれば、それは為政者の期待した良民としての人間像を研究する好素材とされ、様々な分野で広く取り上げられてきた（菅野則子『江戸時代の孝行者——「孝義録」の世界』吉川弘文館、一九九九年ほか）。地域史・女性史の研究においては、「孝子伝」に基づく緻密な調査が蓄積されている（菅野則子「幕藩権力と女性——『官刻孝義録』の分析から」『論集近世女性史』吉川弘文館、一九八六年、妻鹿淳子「『官刻孝義録』の編纂と岡山藩」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』一八号、二〇〇四年ほか）。そして、「孝」という徳目、それを体現した「孝子」、「孝子」を褒賞する「孝子表彰」「孝子伝」は、文学・出版などの分野でも取り上げられてきており（井上敏幸「近世的説話文学の誕生」『説話文学の世界』世界思想社、一九八四年、勝又基「近世孝子伝解題」『明星大学研究紀要：人文学部・日本文化学科』二二～二四号、二〇一四～二〇一六年ほか）、近世の「孝」をめぐる様々な文化的側面、思想動向が明らかにされつつある。

しかし、著者が提示しているように、「孝」の思想内容を抽出した思想史研究は、「孝」の再現・実践としての「孝子」の営みを検討してきたが、その思想と実践がいかにつながり、移り変わったのかという課題が、見落とされているのが現状である。また、従来、「孝子顕彰」と「孝子伝」の編纂に関する研究の論点は、幕府がいかに『孝義録』を通して庶民を教化しようとしたのか、「実際の善行」をいかに言説化し、庶民教化の

素材として活用できたのか、潤色の可能性のあった『孝義録』をはじめとする「孝子伝」はどれほど教化に効果があったのか、といった問題に集中してきた。それは「孝子顕彰」と「孝子伝」の編纂の目的は、いずれも庶民教化にあるという前提の下で研究が行われてきたからにほかならない。しかし、「教化」を前提とした場合、「真実」でない孝行（「偽りの「孝」」、または徳川吉宗の逸話に登場した「偽ても親に孝をつくす者」のような、実際には親孝行でない演出）に対する「表彰」や、幕藩権力のみならず、民間でも広く行われた「孝子顕彰」の意図が説明しきれないという問題がある（この点について、近年、佐野大介「孝子義兵衛関連文献と懐徳堂との間 附翻刻」『懐徳堂センター報』二〇〇五年と、勝又基の研究が注目されており、本書にもその成果が継承されている）。加えて、人々はなぜ「孝」に感心を持ったのか、「孝子」に託した思いや意味とは何であったかについて解明できていないというのが現状であろう。

二

本書は、このような現状と向き合ってきた氏の研究をもとに、以下のように構成されている。

プロローグ――道徳文化史の試み
序　章　問題としての「孝子」――課題・資料・構成
第一章　由緒としての「孝子」――在村における「孝子顕彰」
第二章　文芸としての「孝子」――道中における顕彰と「孝子万吉伝」
第三章　国風としての「孝子」――藩における顕彰と『孝婦鳴盛編』
第四章　競争としての「孝子」――藩国家における顕彰と「孝子伝集」
第五章　公儀としての「孝子」――国家における顕彰と『官刻孝義録』
第六章　主体としての「孝子」――異国における顕彰と『近世蝦夷人物誌』
終　章　道徳文化史という課題
附　録　近世出版「孝子伝」一覧
あとがき／索引

序章では、本書を貫く視点、つまり、「真実」の「孝」のみを対象としてきた従来の社会史・思想史の道徳史研究を相対化するため、「孝子」の作成過程を「孝子」という「表象」から探るということが提示された。こうした視点から、「人為的に創作された存在」、「一種の積極的な創作行為」としての「孝子顕彰」に注目し（一四～一五頁）、「孝子」が創作された場面・メディア・主体・対象・過程を解明することを本書の課題として設定した。

本書各章において、「由緒」「文芸」「国風」「競争」「公儀」「主体」としての「孝子」を取り上げながら、様々な場面・目

的での孝子顕彰についてあらゆる面から考察が行われている。

第一章では、褒美・書付など顕彰の際に誕生したモノに着目し、在村における孝子顕彰を検討した。「孝子」の創作に最も大きな役割を果していたのは村役人であった。「孝子」は彼らにとって自分の役職、理想的な「自己」の「表象」でもあった。「孝子」顕彰に関わるモノは、「孝子」本人にとっても、村役人にとっても、権威を担保する役割を果たす由緒としての価値を有していた。そして、このように、顕彰された「孝子」自身、村の人々及び村役人を含めた民衆の中に、「孝子」に由緒的価値を認める意識が存在していたことが、近世中期における「孝子伝」の流行を支える基盤となったと指摘されている。

第二章では、享保以降の旅文化の普及を背景とする「孝子顕彰」に関わった儒者・文人・公家などの文化的リーダー集団である「同志」の文芸的営みについて検討した。「孝子顕彰」の意図を単なる「教化」としてのみ捉えてきた先行研究に対して、文人の詩歌が貼られた「孝子」万吉宅が文芸的「場」や「掲示板」として機能したことや「孝子顕彰」の文芸的活動としての意義の分析を通じて、当該期の「孝子顕彰」に関わった文化人集団の形成や、その文化的権威、強い発信力の実態を明らかにした。

第三章では、視野を村から藩レベルへと拡大し、龍野藩の事例について分析している。ここでは詩歌というメディアに焦点をあて、「孝子顕彰」の思想構造を「天性・教化・風土」をキーワードとして解明し、以下の内容を提示した。すなわち、顕彰された「孝子」を題材に、人々が詠んだ詩歌の中には次のような論理が見られるという。それは「孝子」の「天性」（＝道徳）は「教化」（＝政治）と「風土」（＝地域）という要素によって具えられたものであるというものである。こうした、「孝子」に関する詩歌を詠む行為を通して、その詠み手たちは、自己の道徳・政治・地域的なアイデンティティ（帰属意識）を確認し、自ら「明君・仁政」という政治言説に参加したのだという。

第四章では、藩という共同体を横断して、「孝子伝集」の登場と展開を分析している。「孝子」には、「孝子伝集」の編纂者たちにとって、君主の徳を誇示し、「明君・仁政」を語るツールという意義があったと主張している。そして、十八世紀の藩国家形成に伴う藩意識の強化こそ、「孝子伝集」がこの時期に多出した背景であるという視点から、「孝子伝集」による「孝子顕彰」について、次のように位置づけている。この時期には、「孝子」の出現自体がもはや珍しくなくなり、その価値が薄れてしまった状況にあったので、自らの仁政をアピールするためには、「孝子」の数で勝負する必要が生まれた。こうして、「孝子顕彰」は「明君・仁政」の競争的言説となったのだという。

第五章では、従来、「庶民教化」の文脈で位置づけられてきた幕府による『孝義録』の編纂を、寛政改革という歴史的文脈において再検討している。『孝義録』の構成やその出版、販売

の状況の分析を通じて、その編纂の目的は、第三章・第四章で示された各藩の「孝子顕彰」における「明君・仁政」アピールを無効化することを通して、幕府の権威を回復することにあったと主張している。

第六章では、『近世蝦夷人物誌』を素材に、「異国」（蝦夷地）における顕彰について分析している。この書の著者松浦武四郎の「孝子」創造は、中国の道徳文明から独立した日本を想定し、日本の中での座標軸によって、アイヌの行動を評価しようとしたものであったという。加えて、彼の「孝子顕彰」は主体的な「国民」を創出しようとする活動でもあり、国境を創出する契機ともなったと指摘している。のちに『近世蝦夷人物誌』の出版が幕府によって拒否された理由について、この書での自発的かつ主体的に善行を行い、主体的に仁政を求める存在としてのアイヌ描写が、仁政によって風俗の良い民を生み出すとする幕府の仁政イデオロギーと理論的に矛盾するものであったからだと解釈している。

終章では、本書での検討をもとに「孝子」という「表象」の多義性を可能にした二つの要素を挙げている。一つは、心より実践の方を重視した人間を評価する基準、すなわち「パフォーマンス重視」という要素。もう一つは、天地人の森羅万象と道徳を連続的に捉える世界観である「儒学思想」という要素。そのうえで、この二要素が消失してゆく近代国家において、「孝子」を創り上げる動機と意欲が衰退していく状況を展望している。

三

本書の内容を一言でまとめるならば、人・村・藩・藩と藩の間・日本／異国の各レベルにおける「孝子顕彰」について、文芸・出版など、多様なメディアを通して検討し、村役人・文化的リーダー・藩儒・藩主・老中など様々な身分の人々が「孝子」の言説とどのように向き合ってきたのかを鮮明に描き出したということができよう。以下、本書の広範な内容からすれば議論の及ぶ範囲はごく一部に止まるが、本書の意義について以下の三点を指摘したい。

第一に、本書の最大の特徴である「表象」という視点。創作された「孝子」は「顕彰」という行為以前に存在しないものである。こうした視点から、「孝子」を解明する作業＝「孝子」に対する関心の諸相を解明する作業として捉え返している（序章）。その結果、「真実」に注目する従来の研究と異なり、「表象」という視点から、近世の「孝子」を観察することで、本書は道徳の思想と実践への理解を深め、両者をつなぐことを可能にした。この視点の有効性は、すでに本書における膨大な史料に基づく考察と分析を通して明らかであろう。

第二に、「孝子」をめぐる言説が、村役人や文人、旗本などの様々な集団の間で流動し、顕彰や文芸活動によって絶えずに生産されてきたことを提示した点。「孝子」が現れた場所に訪

ねてきた人々が「孝子」を披露され、「積極的かつ強引に」書付などを依頼される場面（第一章）、文化的教養のある訪問者の詩歌作成とその共有の事例（第二章）を通して、藩や国といった枠組の内で検討されてきた「孝子」現象の広がりとそれを共有するプロセスが解明された。こうした問題を「孝子」を表彰する「同志」グループの存在と情報流通の視点から再考することは、道徳律の外部からそれを読み返す可能性となり、今後も大きな課題となろう。

「明君」と「仁政イデオロギー」は、本書におけるもう一つのキーワードである。従来は領内の孝子を褒賞した領主が「明君」として称えられたのであったが、本書ではそれを転換させて、「孝子」を領主自身の手によって創作されたものとみなし、その顕彰という行為を重視した点が第三の特徴である。敢えて「私」的な顕彰をめざした「公」を代表する立場の旗本たち（第二章）、「孝子顕彰」は「国家の盛を鳴らす」責任を自覚した藩の地域道徳を任された藩儒（第三章）、他藩を意識して、「孝子」の数で「明君」であることを争い、「孝子伝集」を編纂した人々（第四章）、『官刻孝義録』の編纂をもって公儀権威を回復と各藩への対抗を企図した幕府（第五章）、仁政イデオロギーと理論的に矛盾したため、『近世蝦夷人物誌』の出版を拒否した幕府（第六章）。本書では、あらゆる層における「孝子」の「表象」が、「仁政イデオロギー」が浸透しつつある歴史的文脈に照らされて再検討されていた。これによって、従来、「教化」の枠組の内部において「孝子顕彰」を捉えてきた研究スタイルと差異化し、「孝子」がもつより豊富な意味を見出すことに成功した。一方で、この「明君・仁政」をめぐる藩内、藩と藩の間、幕藩、更に日本と「異国」の間における戦略理論・競争を、「孝子」という「表象」を通して鮮明に描き出したと評価することができよう。

しかし、競争のみを注視したせいか、本書における幕藩間の「孝子」争奪に関する論述に、疑問を感じた点もある。『官刻孝義録』の編纂における藩と幕府のやり取りの事例を挙げてみると、岡山藩の場合、幕府が藩に再三、調査・確認を依頼し、幕府と藩は収集された「孝子」の伝聞の取捨選択にともに参与した（妻鹿淳子前掲論文）というものがある。ここから、幕府も藩も『孝義録』に編入される予定の「孝子」の中身にある程度の関心を示していたことがうかがえる。こうした関心があったことを軽視し、幕府がひたすら藩の仁政アピールを無効化しようとしたという視点のみから『官刻孝義録』の編纂を説明するのは、やや強引に感じた。より多くの事例収集、史料分析をもって論点を補強する必要があろう。

また、本書は表象文化論の道徳史＝「道徳文化史」を確立させることを目的の一つとするが、「道徳文化史」という枠組に関する説明がやや不足しているのではないか。この点について、評者自身の関心とも絡めながら、問題提起を試みることで、この書評を終えることとしたい。「表象」としての「孝子」

を取り扱った本書は、従来の実践と思想を中心とする研究に対して、斬新な視点を提示した。しかし、現段階では「孝」という徳目に限られたものである。それを「道徳史」全体に広げる際に、表象文化論をどのように展開していけるのか。そもそも、「孝」とは、狭い意味での「孝行」の徳目であるほか、より広義的に捉えることができる道徳倫理の重要なキーワードでもある。「孝」の意味を広げることによって、「孝子」から出発した「表象文化論の道徳史」の成果も、思想史研究全般に及ぼすことが可能になるのではなかろうか。これは本書から読者に投げられた大きな課題であろう。

（立命館大学専門研究員）

藍弘岳著
『漢文圏における荻生徂徠
——医学・兵学・儒学』
（東京大学出版会・二〇一七年）

澤井啓一

荻生徂徠研究は、明治期に「功利主義」との類似性が注目されて以来、ながらくその著作を哲学ないし政治思想の考察対象とする形で展開されてきた。もちろん「日本思想」を対象とした政治思想史研究が日本で確立されるには丸山眞男を待たなければならないが、そこで日本における〈近代化〉の重要な指標として徂徠が取りあげられていたことは、近現代の日本人が徂徠に向けた〈まなざし〉がどのような性格であったかをよく物語っている。また文学研究の領域でも、漢詩文制作方法としての「古文辞」は、明治期から取りあげられてきたのだが、一九七〇年代になって吉川幸次郎が徂徠の語学説と文学説、すなわち「古文辞」に関する議論を儒学説（哲学）に先立つ学問方法論として位置づけたことによって新たな展開が始まった。吉川の議論は、すでに村岡典嗣が本居宣長について発見した構図ではあったが、徂徠の「古文辞」論を文学研究という狭い枠内にとどめず、思想史研究との連動性を強く求めた点で重要であった。宣長が徂徠の方法論を「領有」していた以上、吉川の議論